

第40回理学療法士作業療法士国家試験問題
採点を除外することが望ましいと思われる問題

(平成17年3月6日実施)

共通問題	問題番号 (1)
<p>問題1 神経内分泌を行うのはどれか。</p> <ol style="list-style-type: none">1 . 下垂体前葉2 . 下垂体後葉3 . 甲状腺4 . 副腎皮質5 . 副腎髄質 <p>解：1 . 2 . 5 の選択が可能</p>	
<p>理由</p> <p>下記の文献では、「下垂体前葉」「下垂体後葉」「副腎髄質」が、「神経内分泌」に関与するものと理解される。従って複数の解を選択できるため、採点を除外することが望ましいと思われる。</p>	
<p>参考とする文献</p> <ol style="list-style-type: none">1) 二唐東朔 他編：基礎人体生理学 (第2版) . 廣川書店, 平成11年 .2) 後藤稔 編：最新医学大辞典 (第2版) . 医歯薬出版, 1999 .	

第40回理学療法士作業療法士国家試験問題
採点を除外することが望ましいと思われる問題

(平成17年3月6日実施)

共通問題	問題番号 (13)
<p>問題13 股関節について誤っているものはどれか。</p> <ol style="list-style-type: none">1 . 腸骨大腿靭帯によって内転が制限される。2 . 大腿骨頭靭帯の中を血管が通る。3 . 関節包は前方部分が厚い。4 . 骨頭と臼蓋は同心円に近い球関節である。5 . 関節唇が適合性を高めている。 <p>解：解なし</p>	
<p>理由</p> <p>文献1)では「腸骨大腿靭帯は...大腿の外旋と内転を抑制する...」と記され、文献2)では「股関節の外転の制限因子は腸骨大腿靭帯，恥骨大腿靭帯および内転筋群の緊張である．内転の制限因子は対側下肢の接触，股関節屈曲位では坐骨大腿靭帯の緊張である．」と記されており、腸骨大腿靭帯の股関節への作用が選択できない。従って解なしとなり、採点を除外することが望ましいと思われる。</p>	
<p>参考とする文献</p> <ol style="list-style-type: none">1) 長島聖司 訳：分冊解剖学アトラス . P200, 文光堂, 2003 .2) 中村隆一 他著：基礎運動学 (第6版) . P241, 医歯薬出版, 2003 .	

第40回理学療法士作業療法士国家試験問題
採点を除外することが望ましいと思われる問題

(平成17年3月6日実施)

共通問題	問題番号(70)
<p>問題70 誤っているのはどれか。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 心不全とは心疾患による循環不全を指す。2. 右心不全では体循環のうっ血が著明となる。3. 左心不全では左室拡張終期圧が上昇する。4. 心タンポナーデは右心不全の原因となる。5. 大動脈弁狭窄は左心不全の原因となる。 <p>解：1. 4の選択が可能</p>	
<p>理由</p> <p>文献1)では「心不全とは、心臓のポンプ機能が低下し、末梢組織の代謝に必要な血液量が十分に送り出されない状態をいう。」とされ、問題文中「1. 心不全は心疾患による…」という「心疾患」に限るものではないと理解される。</p> <p>文献2)では「心(臓)タンポナーデ」を見る限り、問題文中「心タンポナーデは右心不全の…」という「右心不全」に特定されるものではない。</p> <p>従って複数の解が選択されるため、採点を除外することが望ましいと思われる。</p>	
<p>参考とする文献</p> <ol style="list-style-type: none">1) 松房利憲 他編：高齢期作業療法学。医学書院，2004。2) 後藤稔 編：最新医学大辞典(第2版)。医歯薬出版，1999。	

第40回理学療法士作業療法士国家試験問題
採点を除外することが望ましいと思われる問題

(平成17年3月6日実施)

共通問題	問題番号(78)
<p>問題78 骨折と受傷機転との組み合わせで頻度が低いのはどれか。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 上腕骨顆上骨折 - 肘伸展位の強制2. Monteggia骨折 - 前腕回外位の強制3. Smith骨折 - 手関節掌屈位の強制4. Bennet骨折 - 母指CM関節外転位の強制5. 槌指 - DIP関節伸展位の強制 <p>解：2. 5の選択が可能</p>	
<p>理由</p> <p>「Monteggia骨折は前腕回内位」、「槌指はDIP屈曲位」が受傷機転であり、問題文中の複数の解が選択できることになるため、採点を除外することが望ましいと思われる。</p>	
<p>参考とする文献</p> <p>1) 守屋秀繁 他編集：整形外科学．南山堂，1996．</p>	